工芸概論 3

「工芸の見かた・感じかた」

近現代工芸家の作品

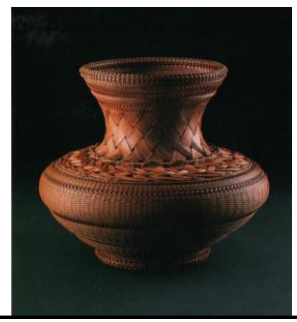
工芸概論 3

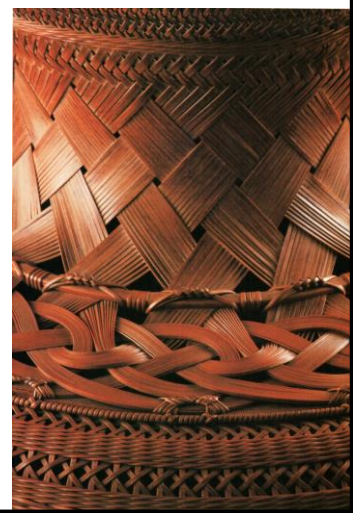
「古代の技法を複雑、華麗に展開」

飯塚琅玕斎

「花籠　宝殿」　昭和23年

琅玕斎は近代作家としての竹工芸制作のパイオニア。
竹の束が一単位となって曲線を描いて組み合わされている。平安時代の竹編技法を基本とし、それを華麗に複雑に展開。





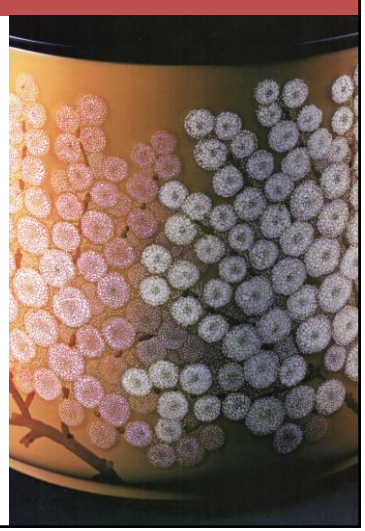
工芸概論 3

「卵殻の破片で描き出す春の情景」

寺井直次

「金胎蒔絵水差」　昭和51年

漆器の表面に漆で文様を描き、それが乾かないうちに金属粉などを蒔いて定着させる技法。
白梅の花の小さな白い破片はウズラの卵殻を細かく砕いたもの、咲きほこる紅白の梅花を表していて、春の雰囲気にあふれている。
卵殻片の間隔、重ねた色の色彩効果への細やかな配慮と技が一体となった作品。



工芸概論 3

「緻密な文様に極まる江戸の粋」

小宮康助

「江戸小紋着物 極鮫」昭和33年

江戸小紋は諸大名が着用した裃（かみしも）がルーツ。文様を打ち抜いた型紙を使って、布に糊を置いて防染した上から、色糊を布にのばして染めてゆくと、防染された部分が白い文様となって浮き出してくる。
鮫小紋の特に細かく精緻なものを、極鮫と呼ぶ。

工芸概論 3

参考

江戸小紋

江戸時代、諸大名が着用した裃（かみしも）の模様付けが発祥。
その後、大名家間で模様付けの豪華さを張り合うようになり、江戸幕府から規制を加えられる。
そのため、遠くから見た場合は無地に見えるように模様を細かくするようになり、結果、かえって非常に高度な染色技を駆使した染め物となった。

工芸概論 3

「図柄を引き立てる伝統の加飾法」
内藤四郎
「銀流線文筥（ふみばこ）」昭和42年

銀を彫金した楕円形の端整な小箱である。
地模様として施された魚々子（ななこ）は、金属面に切先の刃が輪状になったたがねで細かい円形を密に陰刻して表す古くからの技法。
作者は、古い技法を現代の感覚で読みかえ図柄を引き立てるよう効果的に用いている。

工芸概論 3

「網膜を惑わす極彩表現」
太田儔（ひとし）
「籃胎蒟醤文箱 蝶」昭和61年

筐体を竹編で作ることを藍胎（らんたい）という。蒟醤（きんま）とは漆塗の面を刀で線彫りし、そこに色の漆を充損して模様を表す技法である。この技法は伝統性の強いものであったが、この蒟醤は全く発想が違い、網膜混合といわれる効果を狙って模様を作り出している。

工芸概論 3

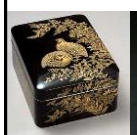
「自然を切り取り、周到に整える」
黒田辰秋
「螺鈿白蝶縞中次」昭和49年

螺鈿は磨いた貝殺を切って器物の表面に貼る加飾法で、その歴史は古い。
糸のこで切り、叩き割った白貝は、自然の状態とはまったく異なった美に転化される。
ひたすらに視覚的快を志向する行為である。

工芸概論 3

「一幅の絵を思わせる立体表現」
前 史雄
「沈金箱　朝霧」平成10年

沈金とは、乾燥後硬化した漆塗面に彫刻の刀やノミで文様を彫り、漆を摺り込んで金箔や金粉をうめるという、石川県輪島の伝統的な技法。
漆工のベージュがかった表面に角ノミで素彫りされた竹林は、細緻な刀の彫刻とぼかし風のラフな点彫りとにより、水墨画風のタッチで表現している。



工芸概論 3

「ガラスの斑紋が醸し出す浮遊感」
岩田藤七
「ガラス飛文平茶碗」昭和41年

近代日本のガラス工芸の分野において、パイオニアとしての役割を果たしたガラス作家である。
茶道具として茶の湯といえば「わび」「さび」ということになるが、彼はガラスで茶道具を作ることによって、表現しようとしたのは「つや」であった。

工芸概論 3

「絶妙の色彩で生み出す必然の調和」
江崎一生
「灰釉鳥文大皿」昭和44年

直径が60センチメートルを超える常滑焼の大皿である。
土と化粧土は淡い色調となり、一方で灰釉は鮮やかな緑色を得て、薄茶、白、緑の絶妙の色彩が加わっている。
それらはまるで雲間に遊ぶ鳥の姿を描き出し、一枚の絵を見ているかのようである。

工芸概論 3

「花の形に重なりあう、走る点文」
森口華弘
「友禅訪問着　薫秋」昭和39年

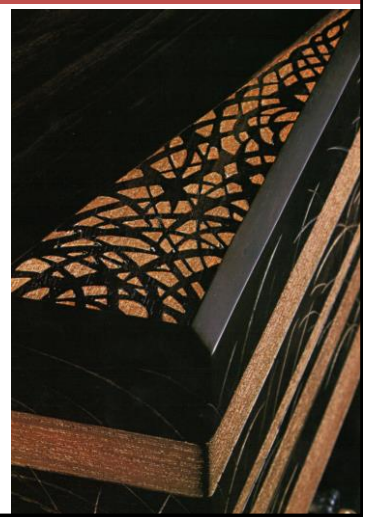
友禅とは米糊の防染剤を用いる染色法である。
右袖から左裾に向けて、菊花に見立てた点文が無数に染められている。
作者の思いは花びらの先端まで緩みなく、それが布全面に広がって、走る勢いをもたらしている。

工芸概論 3

「風雅を生む、巧妙な素材構成」

竹内碧外（へきがい）
「秋草重文庫　むさしの」昭和55年

硬い黒柿材と柔らかい桐材とを京指物の技で組立てた、二段の重ね箱である。
蓋の天では透かし木象嵌（ぞうがん）の桐と黒柿とが斜に構成されている。琳派調の構成で、透かしと線彫りとによる秋草の表現とともに、絶妙な風雅さが満ちている。



工芸概論 3

「氷を思わせる結晶模様の正体」

清水卯一
「青磁大鉢」昭和48年

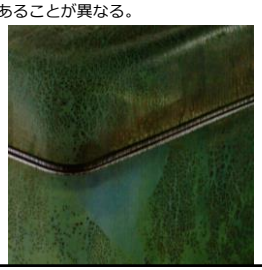
釉薬面に重層的に入った貫入（かんにゅう）が、まるで結晶を思わせるような複雑な様相を示しており、透明感のある青磁釉をより一層ひき立てている。
貫入はやきものの素地と釉薬の膨張率が違うために、焼成後の冷却段階で釉面に生じるひび割れのこと。

工芸概論 3

「吹きガラスの動と静」

藤田喬平
「虹彩」（左）昭和39年
「飾筥（はこ）」（右）昭和48年

この二つのガラス工芸作品は、一方が複雑な動きを見せる不定形な作品であり、もう一方が落ち着いた箱型で全く対照的である。
どちらも吹きガラスで作られているが、前者は滝の水しぶきの激しい動きの一瞬をとらえたもので、後者は型吹きであることが異なる。



工芸概論 3

「漆塗りの艶やかさと素朴さ」

赤地友哉（ゆうさい）
「はりぬき朱八角中次」昭和53年（前）
角偉三郎
「溜漆椀」平成4年（後）

（前）木型に和紙を貼重ねて抜き取り、漆で固めたものを原形とする八角中次は、和紙の軟らかな肌と本朱に黒を混ぜて落ち着いた色調とした朱漆の風合いが艶やか。
（後）漆を一塗りして良しとした漆器の原型としての素朴でたくましい、新鮮な漆塗りの造形である。

工芸概論 3

「青白磁の陰と陽」

塚本快示
「青白磁彫花鉢」平成2年（前）
加藤土師萌（はじめ）
「青白磁鳥獣浮文鉢」昭和36年（後）

青白磁は、釉薬の中に含まれる微量の鉄分によって発色した、青味を帯びた透明紬が特徴。（後）型に文様を彫り込み、胎土を型に押しあてることで陽刻とし、文様を浮かび上がらせている。

工芸概論 3

「再現"を超える素材の一体化」

平田郷陽
「長閑」昭和33年（前）

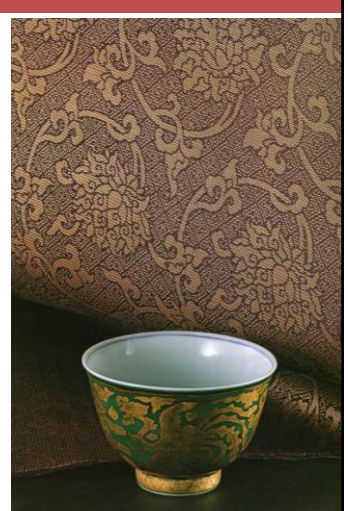
衣裳は木目込（きめこみ）による。
小袖とボディはもはや分かちがたく、硬さと柔らかさが絶妙のバランスで、一体の人形のうちに共存する。
胡粉（ごふん）塗の艶やかな腕から袂の膨らみへと続く優美な曲線にもみなぎって、作者の造形思考の高まりを伝えている。

工芸概論 3

「崇高な世界へと誘う金の輝き」

喜多川平朗
「紫牡丹唐草文羅地金襴」昭和34年（後）
北大路魯山人
「萌葱金襴手鳳凰文煎茶碗」昭和14年（前）

金糸を織り込んだ織物は、中国では宋代から作られていたが、日本では桃山時代から作られるようになり、金襴と呼ばれた。
中国では明代に金彩を施したやきものが作り出され、金襴手と呼ばれた。
なかでも萌葱（もえぎ）金襴手は、緑と金が相互に引き立てあって華麗な彩を示す。



工芸概論 3

「素材の特質を造形に生かす」

田辺一竹斎
「透し編瓢形花籠」　昭和14年（右）
田辺竹雲斎
「方」　昭和49年（左）

（右）高さが61センチになる花籠は、竹編みの基本の一つである六つ目編みで、極めて細い竹ヒゴで瓢形に編み上げられている。
（左）直径10ミリほどの真っ直ぐな丸竹を正倉院の校倉（あぜくら）造りのように縦横交互に積み上げ組んでいる。

工芸概論 3

「型絵染の際立つ個性」

芹沢銈介
「縮緬地型絵染着物」昭和13年（右）
稲垣稔次郎（としじろう）
「信州紬地型絵染着物」昭和28年（左）

「型絵染」とは、型紙と刷毛による色ざしを特色とする技法のことをいう。
（右）琉球紅型（びんがた）がベースにあり、模様が力強く、使用される色も艶やかである。
（左）色の濃淡、にじみを生かし、写生から練り上げ、洗練させた模様に自然の情感を吹き込んでいる。

工芸概論 3

「素材と技の吟味で新しい青磁を」

板谷波山
「霙青磁牡丹彫文花瓶」大正14年（後）
三浦小平二
「青磁蓋物　馬頭琴」平成17年（前）

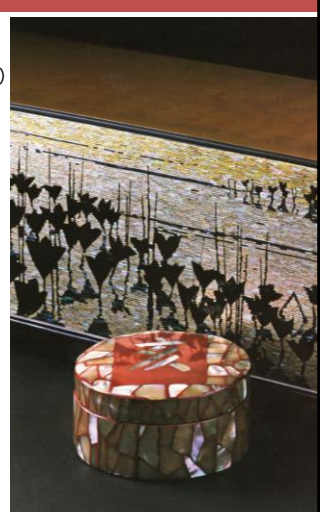
青磁は東洋陶磁の本流と言われているが、つくられた時代や地域によって青色や緑色、黄褐色などを呈する。
（後）独特の釉調に加え、薄肉彫りの技術が生かされており、独自の青磁となっている。
（前）朱泥土を用い、茶褐色の土色と釉薬の組み合わせつまみなどに遊び心をプラスし、新たな世界を築き上げた。

工芸概論 3

「貝殻の輝きが表情を生む」

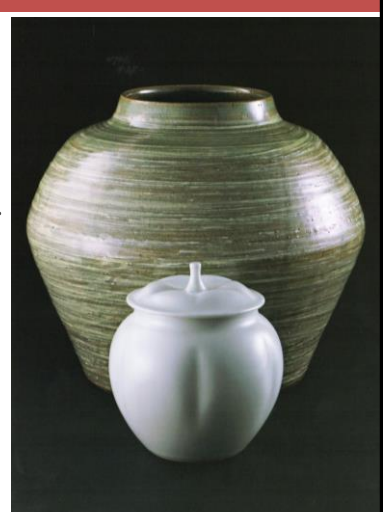
黒田辰秋
「螺鈿亥字香盒（こうごう）」昭和10年（前）
佐々木英（えい）
「蒔絵彩切貝短冊箱尾瀬の朝」昭和57年

漆地の表面に貝殻を嵌め込んだり貼り付けたりして加飾する技法を「螺鈿」という。
（前）蓋に螺鈿で「亥」の字を表し、貝と貝の間に顔をのぞかせる朱色が、その白い輝きを一層ひきたてている。
（後）細かく刻んだ螺鈿が側面全体を緻密に覆い尽している。種類の異なる貝を使用して湿原の水面がきらきらと光る風景を表現することに成功。



工芸概論 3

「素材への飽くなき探究」

富本憲吉
「白磁珈琲器」昭和8年（前）
「土焼刷毛目壺」大正15年（後）

作者は、近代陶芸家のみならず近代工芸家の草分けとして知られている。
（後）一見地味な作風であるが腰の張り出した独特のラインは、勢いのある刷毛目と響き合い、素朴で力強い印象を与えている。
（前）果実を思わせるふっくらと優雅なラインの白磁の器は、洋風のライフスタイルを実践していた作者らしいモダンな作品。